風吹く丘で

高原樹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風吹く丘で

【Ｎコード】
Ｎ８０６４Ａ

【作者名】
高原樹音

【あらすじ】
将来に希望を持てない中学生の冴遊は成長して交流がなくなってしまった幼なじみたちと数年ぶりに再会する。数年ぶりに再会した幼なじみたちはすでに将来の夢に向かって走り始めていた……。

STORY．0：プロローグ

僕らは都内に程近い、東京近郊の街に住んでいる。
人口もそれなりに多い、東京のベッドタウンとして発展してきた街で、
都会でもなく、田舎でもないこの街にはこれといった特徴もないが、
ある程度残されている自然のお陰で住み心地は快適といえるだろう。
　この街で僕の一番好きな場所が街を一望出来る小高い丘にある小さな公園だ。
気の利いた遊具も殆どなく、あるのは古ぼけた鉄棒と滑り台、朽ち果てそうなブランコぐらいだ。
まともな遊具もない、その公園は今では地元の人間に忘れ去られたかのようにひっそりとしていた。
　かつてこの場所で僕らはよく遊んだ。成長と共に僕らは遊ぶことも少なくなり、
ここ数年はまともに顔を会わせることもなくなっていった。家が隣近所の僕らは会おうと思えば、
いつでも会えるはずなのにほとんど会うこともなく、ただ月日だけが流れていった。

「夏の匂いだ…。」
　梅雨の終わりの夕方、僕はいつものこの場所にいた。僕の心が安らぐ、唯一の場所。
もうすぐ、心が躍る夏が来る。でも、僕の心は躍れそうにもない。
　いつからか、僕の心が自分でもわからなくなるほど空虚なものになってしまった。
その原因は探らなくてもわかるが、あえて原因を取り除こうとも思わない。
「はぁー……。」

無意識のうちに出た深い溜め息を残し、僕は腰掛けていたブランコから飛び降ると、
重い足取りで家路に向かって歩き始めた。

「サユー、サユウ！」
突然、背後から僕を呼ぶ大声がし、
驚いて振り向くと、アイツが手を振りながら立っていた…。

そのとき、止まっていた僕らの時間が
再び動き始める音が、聞こえた気がした。

STORY．1：再会

「久しぶりだね、サユウ。」
僕に声を掛けてきたのは、幼なじみの一人、藤原　梨世（ふじわらりせ）だった。
「り、リセ？な、何で？」
名前を呼ばれて思わず、どもってしまったのは、僕、榎木　冴遊（えのきさゆう）だ。
「やだ～！何どもってんの？サユウ。」
梨世は僕の驚く姿を見て、楽しそうにケラケラと笑った。
「だって、家が隣近所なのに、ここ何年かまともに会ってなかったし…。
部屋だって向かい同士なのに、喋らなかった…。」
僕は梨世の顔が見れずに、うつむいたままだった。
「サユウ……。顔真っ赤だよ、かっわい～！」
梨世は僕の顔を覗き混み、再び笑った。
「う、うるさいなっ！」
僕は手で梨世を払いのける仕草をした。
「アハハ、ごめんごめん。」
梨世は笑いすぎて出た涙を手で拭った。
「リセ、まだバイオリンやってるの？」
「うん、やってるよ。」
梨世は僕の問い掛けに真面目な顔で答えた。
「最近は週に何回か東京の先生の所でみてもらってるんだ。」
「へぇ～。」僕らは同じ歩幅でゆっくりと歩いていた。
「バイオリン、好き？」
僕はふと素朴な質問を梨世にぶつけた。
「『好き』というか、もうなくてはならないものかな。」
梨世は穏やかにそう言うと話を続けた。
「初めはママに勧められるまま習い始めて、好きでもないのに毎日

練習しなきゃいけないのがホントに嫌で仕方なかったのに、ママは辞めさせてくれなかったわ。でもね、そのうち自分の腕が上がって難しい曲が弾けるようになるのが嬉しくて、それで今まで続けて来たんだ。今じゃ、コンクールとかでそれなりに入賞してるんだから。」

梨世は少し得意げな表情をしていた。

「今、楽しい？」僕は無意識のうちにそんなことを梨世に聞いていた。

「すっごく楽しい！毎日忙しいけど、充実して楽しいんだ。サユウは毎日エンジョイしてないの？」

梨世は大きな瞳をキラキラさせ、僕の目を覗き込んだ。

「僕は…、僕なんか…。何にも…。」

僕は急に恥ずかしくなって、何を言えばいいのかわからなくなった。

「ふぅーん…。」しばらく梨世は何も言わずに遠くを見つめていた。

僕も何も言わずにただ黙っていたが、まもなく、その沈黙は梨世によって破られた。

「タイガー！」

「おい、リセ～。それに……サユウ？」

その声の方に目を向けると、遠くから大荷物を抱えたジャージ姿の少年が近づいて来た。

STORY．２：昔と今

「タイガ。海外遠征から戻って来たんだ？」
「今日の昼に成田について、今戻って来たところ。」
「そっか、お疲れ。で、結果はどうだったの？」
「勝ったよ、日本代表チームの優勝。まぁ、俺が活躍したから勝ったようなもんかな。」
「うわ～。自慢？」
「ちげぇーよ。リセ学校って？」
「明日から夏休み。」
「えっ！マジ……？俺、明日までかと思ってた。」
「バッカ～、明日が終業式よ。」
「リセ嘘つくなよ。一瞬信じちまったよ。」
僕は２人の会話に入れずに、一歩下がって親しげに話しながら歩く２人の様子をただ傍観していた。
「サユウこっち来なよ。」梨世が僕に呼び掛けた。
「よっ！久しぶりだな、サユウ。」
僕にそう言ったのは、さっきから梨世と話しているもう一人の幼なじみの龍崎　大河（りゅうざきたいが）だった。
「タイガね、すごいんだよ。Ｕ－１６だっけ？海外遠征の日本選抜メンバーに選ばれて、
今日まで海外遠征に行ってたんだよ。」
梨世は興奮しながら、大河のことを僕に説明してみせた。
「そんなスゴイことじゃねぇって。」
大河の笑ったときに細くなる目は幼いころとちっとも変わっていなかった。
「タイガ、カッコよくなったな。」
僕は思ったことを素直に言ったのだったが、大河は僕の言葉を跳ね退けるように返した。

「何だよ、サユウ。急にどうしたんだよ。気持ち悪いな。頭でも打ったか？」
「こうやって3人揃うのもかなり久しぶりだな。小学校の卒業式以来だよな？」
大河は梨世に聞いた。
「そっか～。うちら中学一緒だけど、サユウは私立だしね。」
梨世は僕の顔を見た。

僕は教育熱心な両親の勧めで中学受験をし、それなりに名の知れた私立の中高一貫校に入学した。僕らの住む地域は都内にも近いことがあり、中学から私立に行く者も多いので、
僕のように中学受験をすることはそれほど珍しくないことだった。
一方、大河や梨世たちは地元のごく一般的な公立中学校へと進学した。
僕が小学生のときに毎日塾通いをして勉強に使っていたいた時間に、梨世はバイオリンのレッスン、低学年の頃からサッカーのジュニアクラブに所属していた大河は練習に明け暮れていたため公立の中学校を選んだ。
環境のせいなのか、時間のせいなのか、僕は久々に会った幼なじみたちとの間の距離をやたらと感じた。

STORY．3：微妙な距離

「昨日のうちのクラスのとある男子が隣のクラスの女子に告ったんだって。」
「またかよ！懲りねぇな、とある男子ってアイツだろ。で、返事はどうだったって？」
「え～決まってるじゃん。。彼女が欲しいって理由で告ってんだからフラれるって。」
「まぁな。普通はそうだろ。でも、そういうお前も1年のとき告られて微妙に付き合ってただろ。」
「あれは付き合ったうちに入らないでしょ。第一、好きじゃなかったもん。」
「お前、ひでぇな。」
「何！文句でもあるの？」
梨世と大河が親しげに話している姿を見る度、僕の心の奥がチクチク痛いような変な気持ちになった。
なぜか二人の姿を見ていたくなかった。僕はそんな一心で、話題を変えようとした。
「大河たちは高校受験だろ？どこ行くか決めた？」
「まぁ、そうだけど……。まだよく考えてない。」急に大河の表情が険しくなった。
「サユウは中高一貫だから内部進学するんでしょ？」梨世が僕に言った。
「僕はそうだけど、中には違う高校に行くって言ってる人もいる。」
僕はそう言うと、僕自身が振った話題が、3人の間に流れる空気を気まずいものにしていることに気付いた。
「せっかく幼なじみ3人が集まったんだし、お互い携帯のアド交換しとこうよ。」
そう言って梨世は制服のポケットから携帯を取り出した。

「……。」梨世の言葉に僕も従った。
「リセ、お前どうせ俺の知ってんだから、サユウに教えてやって。後でメールしてくれ。俺、この後用事があるから先帰るな。サユウ、また会おうぜ。じゃあな！」
そう言い残し、大河は足早に去って行った。
「タイガはいつもあんな感じ？雰囲気変わったね。」
僕は思わず梨世に言った。
「ん～、そんなに変わったかな。あたしは毎日学校で会ってるせいかな。タイガに会ったのは久しぶり？」
梨世は僕に尋ねて来た。
「小学校卒業してから全然会ってないや。」
僕はぶっきらぼうにそう言うと、梨世から目線を外した。
「ふぅん。タイガとてっきり男同士遊んでると思ってた。」
梨世は興味なさそうに言ったっきり、何も言わなくなった。
僕も押し黙ったままだった。
二人の間に沈黙の時間が流れる。
しばらくして梨世が口を開いた。
「タイガの携帯教えるから携帯出して。」
僕の携帯に梨世から赤外線通信で大河の情報が送られてきた。
「タイガとリセって同じクラスなの？」
僕は携帯をポケットにしまいながら、梨世に尋ねた。
「1年のときは違ったんだけど、2年から一緒。学校だとあんまり話さないけどね。
幼なじみだからって一緒にいるのもカッコ悪いでしょ。」
梨世は照れ臭そうに言った。
「そうなんだ…。」
僕は何だかがっかりした気分になった。
「サユウは学校で気になる女の子いないの？」梨世は僕に聞いてきた。
「今の所はいないよ。」僕は溜め息をついた。

「そりゃ残念だね。」梨世は小さく笑った。
気付くともう家の近所に差し掛かっていた。

STORY．４：帰りたくない家

家が隣の梨世と別れた後、僕は静かに家の中に入った。
「ただいま。」
「サユウさんお帰りなさいませ。今日は夕食はどうされますか？」
奥から住み込みの家政婦の牧田さんが出て来た。
「この後塾があるから夕食は要らないよ。代わりに夜食を用意お願い出来る？」
僕は笑顔で牧田さんに言った。
「何かリクエストはありますか？」
牧田さんが僕に聞いた。
「すぐ食べられてあんまり重くないもの。」
僕はそう告げ、階段を昇り、２階にある自室の扉を開けた。
制服から私服に着替え、ブレザーやスラックスをハンガーに掛けた。
「ふぅ…。今日も塾か。もう出ないとな…。」
時計を見ると、出掛ける時間が迫っていた。
「もうお出かけになりますか。」
僕の行動を察した牧田さんが玄関まで僕を見送りに来てくれた。
「そういえば、サユウさん、昼間にお父様からお電話がありましたよ。」
「父さんから？」
僕は思わず牧田さんの顔を見た。
「父さんは何て？」
「いえ、サユウさんの不在を知ると特に何もおっしゃられずに。」
牧田さんは困惑した表情を浮かべていた。
「そう……。ありがとう、牧田さん。じゃあ、行ってきます。」
僕は返す言葉が見つからなかったので、そう言って家を出た。

―――父さんから電話？普段連絡してこないのに、何でだろう。

僕はそんなことを考えながら塾に向かっていた。

僕の父は家族と離れて九州にいる。祖父が経営する総合病院を継ぐためだ。
そもそも、僕の父は病院を経営する一家の次男だった。
厳格な祖父の跡を継ぐのはもちろん長男と決まりきっていた。
父も自分は後継者になるとは少しも考えていなかったので、
東京の医大を卒業してからずっと東京の総合病院に勤めていた。
それが3年前に伯父が不慮の事故で逝去したことで状況は変わった。
祖父は父に九州に戻って来るように命じた。
最初、父は家族揃って九州に移住することを提案した。
しかし、父と同じく医者をしている母は簡単には移住出来ないと反対した。
もうひとつの大きな理由が、僕が今の私立中学に合格したことだった。
いくつかの事情が重なり、父は家族と離れて九州に住むことになった。
それ以来、父は月に一度はは帰って来たが、今では滅多に帰って来ることも無くなった。
父と母は僕が物心ついたころから冷めた関係だったように思う。
僕に8歳下の弟が生まれたころからさらに冷めたきった関係になり、
お互い口を聞かないのは常で、顔を合わせれば、　時折ひどく言い争うこともあった。
そのうちに父は仕事が忙しいという理由でなかなか家には帰って来なくなった。
母も帰宅が遅く、僕たち兄弟の世話や家事をこなす暇も無かった。
そんな母に取って代わり、住み込みの家政婦として雇われたのが、牧田さんだった。
すでに自身の子育てを終えた牧田さんは常に僕らのことを気にかけてくれるので、

円満な家庭環境に恵まれない僕らは随分と救われた。弟は両親よりも牧田さんに懐いている。
牧田さんがいなければ、僕らの生活はもっと寂しいものになっていただろう。
僕はそんなことをずっと考えていた。

「…で、ここはこうなります。……榎木君、わかりましたか？」
「あっ……はい。」
講師の問い掛けで、僕は塾で講義を受けていたことを思い出した。
それからもその日は上の空で、講義には身が入らなかった。
家に帰り着くと、牧田さんが笑顔で出迎えてくれた。
「お疲れ様です、サユウさん。」
「ただいま。」
「お夜食はいつお召しあがりますか？」
牧田さんが尋ねた。
「先にお風呂入るから、出て来たら部屋に持って来て。」
僕は疲れきった身体を引きずり、バスルームへ直行した。
風呂から上がると、牧田さんが僕の部屋まで食事を運んで来てくれた。
「ありがとう。」
「サユウさん、お勉強頑張ってくださいね。」
牧田さんは静かにドアを閉めた。
「今夜はうどんか。」
牧田さんが作った美味しいうどんを啜ると、優しい味で身体が温まった。

ＳＴＯＲＹ．５：電話

僕はふと時計を見た。
――午後１１時半過ぎ。
父さんは仕事が終わって、家に着いていることだろう。
携帯を手に持ち、父さんの携帯番号を押した。
「はい。榎木です。」
久々に聞く、父の逞しい声。
「もしもしお父さんですか？サユウですが、今大丈夫ですか？」
僕は恐る恐る声を出した。
「冴遊か、お前から珍しいな。元気か。」
「はい、元気です。牧田さんから昼間にお父さんから電話あったって聞きました。」
「あぁ、学校だったんだな。すまないな。」
「何か用事があったんですか？」
僕は早く父から用事を聞き出そうとした。
「そうだな。これから話すことは重要なことだからよく聞いて欲しい。」
父は重々しい声で言った。
「はい。」
僕は静かに返答した。
「お母さんは仕事か？」
「仕事が忙しいそうでいつも家に帰りつくのは深夜ごろになってるみたいです。
お父さんの御用件はなんですか？」
僕は父を急かした。
「そうか。率直に言うぞ。」
「こういうことは家族が揃う場で言うべきなんだが……。」
父は一拍置いて言った。

「父さんと母さんは今離婚協議中なんだ。意味はわかるだろう？」
「意味はわかります。」
僕は声色を変えることなく答えた。
「仮に聞いておくが、冴遊は父さんと母さん、どちらにつきたいかね？」
父は慎重に尋ねた。
「僕はどちらにもついていこうとは思いません。どちらの重荷にはなりたくありません。
でも、まだ僕は未成年だから保護者の監督下にいる義務があります。
敢えて言うなら経済力がある方についていこうと思います。
親の一方的な理由で経済的困窮な生活に陥りたくありません。」
僕は一気に言った。
「そうか……。お前たちには迷惑をかけて申し訳ないな。」
電話の向こうで父の声が震えているのを感じた。
「謝らないでください。お父さんたちの状態を見てたら、
いつか離婚して当然だと思っていましたし、
僕はもうお父さんやお母さんに求めるものは何ひとつありませんし、
気にしないでください。僕のことよりも弟の心配をしてあげてください。彼はまだ小さな子供です。」
僕は淡々と言葉を発した。
「そうか……。」
父は黙り込んだ。
「用件はそれだけですか？このことについてはお母さんは何も言っていませんが、
離婚が正式に決まったら僕らに詳細を伝えて下さい。」
僕は更に話しを続けた。
「僕は明日も早くから部活の練習がありますから、お父さんおやすみなさい。」
そう言って僕は一方的に電話を切った。

――――知らないうちに涙が頬を伝っていた。
僕が電話で言ったことは全て嘘だ。
本当は頭に雷が落ちたような衝撃が僕を襲っていた。
でも、僕が動揺している姿は他の人には見せたくなかった。

ＳＴＯＲＹ．６：屋上（前書き）

かなり間が空いてしまいましたが、
頑張って更新していきたいと思います。

STORY．6：屋上

――――親が離婚したら、場合によれば苗字が変わるのか。
僕は昨夜の出来事が忘れらずに午後の授業をサボって校舎の屋上に寝そべっていた。
「そこにいるのだれ？」
急に頭の上で声がしたので、上体を起こしてみると、そこにはセミロングの髪をポニーテールに結んだ女子が立っていた。
「榎木くん？副会長がサボりなんて珍しいわね。」
彼女は大垣香奈子（おおがきかなこ）。一年生のときに同じクラスで共にクラス委員をしていた。現在は生徒会長の座についている。
「ああ、ちょっとね。生徒会長こそどうしたの？」
「世の中には知らなければ幸せなこともあるのよ。」
大垣さんは転落防止柵にもたれ掛かった。
「はぁ？意味わかんねぇ。」僕はぽつりと呟いた。
「ふふ。榎木くんには関係ないことよ。」大垣さんは僕のほうを向かい見た。
「榎木くん、暗い顔してる。何かあったの。」
「なんでもない。それこそ大垣さんには関係ないよ。」僕は再び寝そべった。
「君には関係ないことだよ。」僕はそう繰り返した。
「今にも泣きそうな顔してる。貯めてるものを出せば楽になるよ。私で良ければ話しを聞くよ。」
ずけずけと僕の中に入ってくる大垣さんに嫌悪感も感じながらも、気付けば胸の内を打ち明けていた。
「両親が離婚の話し合いを進めてるらしいんだ。昨日離れて暮らす父親から電話で知らされた。
うちの親は昔から不和だったから予想してたことではあったけど、いざ目前にすると、動揺する。」

「そう……。」彼女は少し黙って、それから言葉を続けた。
「榎木くんはそれなりに苦しいと思うけど、離婚なんてそんな珍しいことじゃないと思うわ。
それに……、両親が揃ってるだけでも幸せなほうじゃないかしら。」
「……はぁ？何それ。人が本気で悩んでるの見てて楽しいかよ。」
思わず僕の本音が出た。
「ううん。そういうつもりじゃないの。ただ、羨ましいって感じただけ。」大垣さんはそう言ったきり口をつぐんだ。
「羨ましい……？」僕は大垣さんの謎めいた発言が気になった。
「どういうこと？」
「ううん。聞かない方がいいわ。さぁ、もうすぐ授業が終わるわ。さすがに生徒会の人間がずっとサボるわけもいかないでしょ。教室に戻りましょう。」
大垣さんは僕の制服の袖を掴み、引っ張った。
「あ、何すんだよ。」　大垣さんは僕の抗議にちっとも耳を貸そうとしないので、仕方なく僕は大垣さんの後に続いた。
「私はA組、榎木くんはD組でしょ。ここで別れましょ。放課後、生徒会があるから、またね。」
それじゃ、と言って大垣さんは少し早めに授業が終わった移動教室のクラスの波に飲まれるように去っていった。
僕は自分の教室から授業の終わりを知らせるチャイムが鳴るのと同時に、教科担当の先生が出てくるのを待って、そっと教室に戻った。
教室はワイワイ、ガヤガヤ騒がしく誰も僕が戻ってきたことに気付いていないようだった……
と思ったのは僕だけで、三年間同じクラスで部活の一番の友人、緒方直樹（おがたなおき）がニヤニヤしながら近づいてきた。
「サユウ、お前昼休みの後からどこ行ってたんだ？」
「ちょっと気分が悪かったから保健室に居た。」僕は見え透いた嘘をついたが、直樹は鋭かった。

「おっかしーな。俺もさっきまで保健室にいたんだけど、生徒は俺以外いなかったけどな？」
直樹は意地悪な笑みを浮かべていた。
「じゃあいなかった。」僕は自分の席につき、直樹は僕の机に頬杖をついていた。
「本当は屋上にいたんだろ？俺、保健室から教室に戻る途中で、お前と大垣さんが屋上から降りてくるの見たぞ。」
直樹は僕の耳元でそっと囁いた。
彼の吐息があまりにも生暖かかったので、僕は思わずぞくりと身震いをした。
「気持ち悪ぃな。耳元で囁くなよ。」
「で、何してたんだよ、大垣さんと屋上で。生徒会長と副会長が。」
尚も直樹はにやにやとしつこく聞いてきた。
「あぁ。確かに大垣さんと屋上にいたさ。でも、先に僕が屋上にいたところに大垣さんが来て、ただそれだけさ。面白いことはひとつもないさ。」
　まもなくしてホームルームを告げるチャイムが鳴ったので、直樹はふーんと興味がないような反応を示して、僕の傍を離れた。

STORY．7：リスク

「ねぇ榎木くん……。」
「何？大垣さん。」
生徒会議が終わり、僕が帰りの身支度を整えていると、大垣さんが話しかけてきた。
「一緒に帰らない？」
「別にいいよ。」
そんな成り行きで僕らは一緒に帰ることになった。
「さっき大垣さんが僕に『知らない方がいい。』って言ってたのすごく気になるんだけど……。」
僕は大垣さんの顔色を伺いながら、おずおずと聞いた。
「どうしよっかな～。どうしても聞きたい？」大垣さんの問いに僕は思わず、コクリと頷いた。
「じゃあ特別に話してあげる。でも、聞かなきゃ良かったって後悔しないでね……。」
クラスごとに仕切られた下駄箱を挟んで大垣さんの声が響いた。だが、一足先に革靴を履いた僕はその声に反応せずに、昇降口の前で大垣さんの姿を待った。
間もなく大垣さんは僕の隣にやってきて、僕らは同じ歩調で駅に向かい始めた。
「ごめん、さっき聞いたこと忘れて。聞いちゃいけないことだよね。本当にごめんよ。」
僕はとても惨めな気になった。
「榎木くんなら…、榎木くんになら話してもいいよ。でも、聞いて後悔するかも。聞かなきゃ良かったってそう感じるはずよ。それでもいいなら話してあげる。」
大垣さんは寂し気な表情を浮かべていた。
「大丈夫。聞かせて？」僕は大垣さんが言葉を紡ぐのを待った。

大垣さんは一つ深呼吸してぽつりぽつりと、彼女のそれまでを語り始めた。
「私ね、小さいとき児童養護施設で育ったの。生まれてすぐ、乳児院に預けられて、
その後から養護施設に入ったから本当の親のことは少しも知らないんだ。」
僕は大垣さんの身の上話を聞いて返す言葉が見つからなかった。
「でも、養護施設に入って少し経ったときに、ある夫婦が養護施設を訪れた。
彼らは子供が欲しくても持てなかった。どうしても子どもが欲しかったから彼らは養護施設に入って入所してる子どもの中から養子として迎え入れることにしたそうよ。
そのときが夫妻と私の出会いだったの。大勢いる子どもたちの中で、なぜか私が夫妻と縁があったみたいで、何度か面談をして、
法的な問題もクリアーして私は彼ら、大垣夫妻の養女として正式に迎え入れられた。
それが今の両親なの。私を実の娘のように可愛がってくれて、幸せな生活を与えてくれた両親には感謝してもしきれない。
だから、優秀な成績をとって両親を喜ばせたいの。それぐらいしか今の私には出来ないでしょ。
大人になって、もっともっと恩返しをするために今のうちにたくさん勉強しなきゃならないと思うの。
今のうちに頑張って沢山勉強しておけば、
将来の選択肢が増えるでしょ？
生徒会に立候補したのも、そのため。私は将来的に、両親が経営している事業を手伝いたいって考えてるから、なおさらね。ビックリしたでしょ？」
大垣さんは僕の顔を見てニッコリ笑った。
「話してくれてありがとう。経緯はどうあれ良い両親に出会えてよかったね。大垣さんの持ってる目標とっても良いと思う。僕もそん

な両親が羨ましいよ。」
「ふふ、ありがとう。榎木くんのご両親ってどんな人？」大垣さんは逆に僕に尋ねた。
「僕の両親は……両親とも医者なんだ。父親は元々、都内の大学病院の内科医をしていて、
母親はまた別の総合病院の小児科医。
でも、今父親は九州で祖父が経営してる病院で院長をしてるから家族と離れて暮らしてるんだ。」
　僕はなるべく余計なことは言わないように気をつけた。
「そうなんだ。榎木くんは両親の跡を継ごうとか考えてたりする？」
「まだわからないんだ。何かわからないけど、医者以外の仕事がいい気がするんだ。
それを両親に言ったらきっと怒られると思うんだ。うちの親って凄く厳しい人だから、そんなの我儘だって言われておしまい。
うちの親は自分たちがそうしてきたように、僕を医者にさせようしてるんだ。
そのために中学受験して、この学校に入ったもんさ。」僕は深いため息をついた。
「まだ私たち中学生だもん。将来のことなんかまだ漠然としてて決められない人がほとんどじゃないかな。
焦らなくても平気だよ。高校でじっくり進路を考えればいいじゃないのかなって、思う。」
　大垣さんはそう言って、僕の瞳を真っ直ぐ見つめた。
「大垣さんには敵わないなぁ。それもそうだね。」僕はハハッと小さく笑った。
「ひとつ聞いていい？」
「うん、何。」
「榎木くんがこの学校に入ったのって自分の意思？」大垣さんは僕に問いかけた。
「うん。そうだと思う。中学受験自体は親に言われるままだったけ

ど。
でも、結果的にこの学校で良かったって思ってる。校風もかなり気に入ってるからね。」僕は素直に答えた。
会話が弾み、いつの間にか僕らは学校の最寄り駅に辿り着いていた。
「そっか、それ聞いて良かった。私もこの学校で、良かった。」
「……榎木くんとも一緒の学校だし。」大垣さんは急に改札の前で立ち止まった。
「えっ？」僕は改札にＩＣカードをタッチして一足先に抜けていた。
「ううん。なんでもない。」大垣さんはにっこり笑ってＩＣカードをピッとして改札を抜けた。
「私はこっち方面だけど、榎木くんは？」
「あっ、僕は反対側。」
「そう、じゃあここで。また明日ね。バイバイ！」大垣さんは大きく手を降って、僕に別れを告げた。

STORY. 8：夏休み

梅雨が終わり、蝉の鳴き声が一層賑やかに、本格的な夏が始まった。
それと同時に、僕の学校も梨世たちの学校にも夏休みが訪れた。
　僕は午前中は部活のバスケットの練習で学校に、午後は夏期講習で塾に通っていたので、本格的な休みに入ったのは、夏休みに入って数週間たってからだった。
———大垣さんがあの日最後言った言葉、気になるな……。
僕は別れ際に大垣さんが言った意味深な言葉を頭の中でずっと考えていた。
大垣さんとは、あの日話をしてから何も話す暇がなく、そのまま夏休みに突入してしまったので、それ以来会っていなかった。

久々にゆったりした夜の時間、僕はベッドの上でゴロゴロしながら、あるひとつの答えにたどり着いた。
———僕のことを好き？なーんてことがあったりするわけ……あるのかな。
僕は正直そういう関係にはウトい。というか、自信がない。
何かと、梨世のことが頭に浮かぶ。やっぱり、自分は梨世が気になるんじゃないか。

　僕はベッドから立ち上がって、窓を開けた。
僕の家と梨世の家は隣同士で、互いの部屋が面している。
幼いときは互いの部屋の窓を開けて会話をすることもあったが、成長した今は
生活のパターンも違い、部屋にいる時間も違うこともあり、
互いの部屋の窓を開けていることが少なくなった、というか、ここ数年はゼロに等しい。
カーテンの隙間から、梨世の部屋の灯りが漏れていた。

――梨世、部屋にいるのか。今、勉強してるのかな。
僕が何となく梨世の部屋の方を見つめながら窓辺に寄りかかっていると、窓に人影が近づいてきた。
「あっつ～。お風呂でのぼせちゃった。」
風呂上りの梨世が自室の窓を開けた。すると、梨世は初めて僕の存在に気づいたようだった。
「あっ、サユウ。元気？」
「うん。元気。リセは？」
「あたしも元気。」
「そう。」
僕は梨世の姿を見て赤面してしまいそうになった。
「リセ、その格好……。」
「あぁ、今お風呂入ってたから暑くてさぁ。」
そう言う梨世の格好は短パンを捲り上げ、キャミソールの裾を縛り、という出で立ちだった。僕の視線に気付いた梨世は
「サユウ、風呂上がりのあたしに興奮した？」
と言って、短パンを元に戻した。
「あのなぁ……。」
僕は反応するのも馬鹿らしくなった。
「リセ、お前受験勉強してるの？」
「うん。バイオリンのレッスン少なめにして、塾行ってるよ。でもなかなか思うように成績が上がらなくてさぁ。特に数学が全然ダメ。
期末もボロボロで、塾の模試ではホントにヒドくて理数の先生に『数学さえなければ楽々合格圏内なのに数学が致命的だな』って呆れられちゃったよ。」
梨世はまるで他人ごとのようにケラケラと笑った。
「そんな笑ってて平気なのか。」僕は笑っている梨世がひどく心配になった。
「うん。まぁーなんとかなるっしょ。」

「苦手なら今から数学克服したりほうがいい気がするけどなぁ。」
僕はぽつり呟いた。
「だって、苦手なもんは苦手だもん。……サユウ、教えてって言ったら教えてくれる？」
梨世の言葉は僕の予想外だった。
「中学レベルのなら教えられるけど。」
「ホント？じゃあさあたしのカテキョしてよ。」
「カテキョやってて……。」僕が戸惑っていると、尚も梨世は続けた。
「あたし塾に行ってるけど、講義の進みが早すぎてついていけないんだもん。学校の授業もそうだけど。塾で数学の個別授業するのも、新たに家庭教師頼むのにもお金かかるじゃない？で、親にも言いにくいからさ。」
『親に負担かけたくないっていうのはわかるけど、僕はいいのか？』と、僕は心の中で思ったが、その言葉は自分の中に留めておくことにした。
「わかった。いいよ。その代わり、厳しくするから覚悟しておけよ。」
僕は仕方なく、梨世の家庭教師を買って出た。
「やった！ありがとう、サユウ。じゃあ、早速なんだけど、夏休みの宿題があるから、明日家に来て勉強教えてね～。じゃ、おやすみ。」
梨世はにっこり笑って、窓を閉め、さらにカーテンを引き、僕の視界から
完全に消え去った。
「あいつ、人の予定も聞かないで。まあ、明日ヒマだからいいけど。」
僕は梨世は相変わらずな性格だと再認識した。

STORY．9：カテキョ（前書き）

なんと1年振りの投稿となってしまいました。
時間がかかっても、何とか完結出来るよう頑張って行きたいと思います。

STORY．9：カテキョ

僕は家庭教師を頼んできた梨世のために、
朝早くからパソコンに向かっていた。
「ふぁぁ、眠い……。昨夜、リセのために問題まとめて作ってたら明け方になってたし、ベッドに入っても少ししか寝れなかったし……。
なんで、自分はわざわざ問題作ってんだって、独り言多いし……。」
僕はふわぁと大きな欠伸を自室に残し、席を立った。

「お兄ちゃん、おはよう。」朝一で僕に話しかけてきたのは、８歳下の小学1年生の弟、奏人（そうと）だった。
「おはよう、。奏人、牧田さん。」僕は欠伸をしながら答えた。
「おはようございます、サユウさん。
あら、もうしばらくは部活や夏期講習もないのに、ずいぶん早起きですね。」
「ちょっとね用事があってね。」
僕はキッチンでコーヒーを淹れながら答えた。
「な～に、サユウ。デート？」
牧田さんと僕のやり取りを聞いていた出勤前の母親が現れた。
「ちがう、ボランティアでリセの勉強を見てやるだけ。」
「まぁ、そうなの？いい事じゃない。でも、あなたの勉強もしっかりなさい。
それと奏人（そうと）の勉強も見てあげてちょうだいね。」
母は僕の顔を見るとそう言った。
「奏（そう）は僕より頭いいから平気だよ。母さんには関係ないんだし、さっさと仕事に行けって。」　僕は母の言葉に苛立ちを感じ、つっけんどんに答えると、テーブルに置いてあった菓子パンとコーヒーの入ったカップを持って、

階段を駆け上った。
「冴遊ったら冷たい子ねぇ。奏ちゃんママお仕事行ってくるからね。」
「うん。行ってらっしゃい。」奏人は母にギュッとしがみつき頬を摺り寄せると、静かに離れた。
「じゃあ、牧田さん。いつものことだけど、あとお願いしますね。」
「お気をつけて行ってらっしてください。」
階下では出かける母とそれを見送る牧田さんとのやり取りが聞こえてきた。
僕はその様子を静かに伺うと、そっと自室に入った。

僕はコーヒーを一口啜って、ベッドに横たわった。
「母さんがいると息が詰まる……。いつからこんな状態なんだっけ？」
――――母さんは弟を心配する言葉はあっても、直接僕を心配する言葉をかけてくれない。
別に母親が優しい言葉をかけてくれるのを期待するほど子どもでもない。僕の両親は昔からこんな感じだ。

気づくと、いつの間にか眠ってしまっていたようだった。頬には無意識のうちに涙が流れ出ていた。と、そのとき梨世から電話がかかってきた。
「はい。」
「はいじゃな～い！遅いよ、あたし準備万端にして待ってたんだから、今すぐ来て。」
「教えてもらうのに大層な身分だな。今から行きますよ、お嬢様。」
僕はそう言うと、必要な物を持って立ち上がった。
「分かればよろしい。」梨世はキャハハと笑い声の途中で電話を切った。
家を出ようと玄関のドアに手をかけたところで、牧田さんに掴まっ

た。
「サユウさんお出かけなられますか？」
「うん、ほら梨世んとこ。じゃあ約束あるから。」
「そうですか。ではお気を付けて。」
と言って、牧田さんはにこやかに僕を送り出した。

僕の家から歩いて数歩、僕は藤原宅のインターフォンを押した。
「遅い～！入ってきて。」インターフォンを通して梨世の声が返ってきた。
「おじゃましまーす。」僕はそろりと玄関に入った。
僕が玄関に入ると、梨世がリビングから姿を現した。
「わざわざありがと。リビングに行っててていいよ。何飲む？」
「何でもいいや。」
僕は辺りを見渡し、ソファーに腰を下ろした。
「今はリセひとり？」
「そうだけど。はい、麦茶。」梨世は僕の前に冷えた麦茶を差し出した。
「ありがと。」
「お母さんは仕事。お姉ちゃんは友達と旅行、弟もスポーツクラブの合宿でいないけど？」梨世はそう言ってソファーに座り僕の顔を見た。
「サユウ、目真っ赤だよ。どうしたの？」
「…何でもないよ。」
「何でもない？ように見えないけど……。」
梨世は怪訝そうな表情を浮かべた。
「まぁ、何だっていいじゃないか。それより、リセのために僕の時間割いてるんだから、数学やるぞ！」
僕は梨世の為に用意した問題集を取り出し、梨世の目の前に置いた。
「これリセ用に作った問題。昨日の夜まとめてたんだ。」
梨世は問題集をパラパラめくった。

「わぁお。これ、あたしのために？」
「そ。まあ、リセのことだから、分厚い問題集持ってきてもやる気起こさないだろうから。
とりあえず数学は基礎から始めよう。まず、この中1レベルの問題から解いて。」
「はぁ～い。」
僕は梨世が問題を解いてる間、部屋の中を見渡した。最後に梨世の家に入ったのは何時だろうか――――。
彼女の母親の趣味だろう、リビングのあちこちに花が活けてあり、家具の配置も少し変わっていた。
「なんていうか、前こんなに花飾ってあったっけ？」
「お母さんが最近お花に夢中なの。数年前からハマりだして、今は展覧会に出品したりしてるの。」
「へぇ～。なかなかいいセンスしてるじゃん、お母さん。」
「サユウが誉めてたってママに言っとくよ。」
「おぅ。てか、お前早く問題解けよ。」
僕は梨世の頭を定規で軽く叩いた。
「いったぁっ。」
梨世は膨れっ面になってみせたが、僕は無視して、梨世の頭をペチペチ叩いた。
「あれ？サユウのせいでどこやってたかわからなくなった。」
「人のせいにするなよ。」
「じゃあ、あたしが終わるまでゲームしてて。」
「なんじゃあそりゃ。」と、言いつつ、僕はゲーム機のスイッチを入れた。

STORY．10：夕暮れ時

梨世に数学を教えた後、梨世が夜から母親と出かけるというので、僕は夕暮れ時のあの場所に向かった。

街の高台にある公園――――いつもは誰もいないはずのその公園からボールが弾む音が聞こえてきた。

「誰かいる。」僕はがっかりして、来た道を戻ろうとした。

すると、ボールの音が止み、不意に呼び止められた。

「サユウか？」

僕が振り返ると、大河がサッカーボールを小脇にかかえていた。

「タイガ？なんでこんなところに？」

「それはこっちのセリフ。俺はここで自主練ってわけ。お前は？」

「僕は夕景を見に。」

僕は大河の目の前を横切って、ブランコに腰掛けた。

「なんだ、そりゃ。」

大河はボールを地面に置き、僕の隣のブランコに腰掛けた。

「可笑しいか？」

「いや、お前っぽい……。ガキのころはよくここで俺ら遊んでたな。」

夕日が僕らの住む街を紅く染め、今かと闇夜に捕らわれようかとしていた。

「いつも3人一緒だったのに、いつからか遊ばなくなったのな。」

夕焼けを見ていると、不思議と過去の日々が浮かんだ。

「サユウは将来はどうするつもりなんだ？」大河が尋ねた。

「将来、ねぇ……。何の目標もないよ。」僕は小さくハハッと笑っ

た。
「そうか。学校は？楽しい？」
「ううん。あんまり楽しくはないな。中学受験して入った学校なのになぁ。
タイガ、高校はどうすんだ？」僕は大河を見た。
「豪陵橋高校っていう九州にあるサッカーの名門校からスカウトされてんだ。
ほかに何校から声をかけてもらってるから、どう返事するかは俺次第ってことかな。
まあ、それを全部蹴って地元の高校に行くのもありだと思ってるけど、本命は豪陵橋かな。」
「それじゃあ、地方なら寮生活とか？」
「あぁ。今のうちに自立しとかねーとな。」
大河はニカッと笑った。
「そっか。タイガの目標はサッカー選手だもんな。」
「まぁな。俺はサッカー選手になるのは決まってるも同然だしな！俺自身の実力がどこまで通用するかは未知数だけどな。」
大河は胸を張った。
「才能があるやつはうらやましいな。僕は何にも持ってないからな。」
僕は自分がひどく惨めに思えた。
「お前だって、勉強出来んじゃん！俺、教科書見たら3分で寝てるし。」
大河は僕の背中を軽く叩いた。
「勉強が出来たって、何にもならないさ。僕から勉強を取ったら、何にも残らない。
所詮、僕はその程度の人間なんだ。」
「おい、お前。何言ってるんだ？」
大河は首を捻った。
「才能があって、将来有望なタイガなんかにはわからないさ。」僕

は肩を竦めた。
「はぁ？お前喧嘩売ってんのか？」
大河はとっさに立ち上がり、隣にいた僕の胸ぐらを掴んだ。
「ふっ。」
僕は小さく笑った。大河はじっとこちらを見据えた。
「夢を持てるやつがうらやましいよ。将来の保障もないのに、馬鹿みたいに夢だけ追って、何になる？
夢だけで金が稼げるか？この世は全てか、…ぐっ。」
言葉を言い終わる前に右の頬に激しい衝撃を感じた、その刹那、地面にしりもちを付いていた。
大河は何も言わず、ただ仁王立ちで、僕を見下ろしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8064a/

風吹く丘で

2010年12月30日00時55分発行